Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-04-28

ドイツ絶対主義期におけるバイロイトの宮廷文化 : 辺境伯ゲオルク・ウィルヘルム研究

川西, 孝男

(Citation)
歴史学研究月報,571:4-6

(Issue Date)
2007-07

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90000583

ヨーロッパ中近世史合同部会四月例会報告要旨

二〇〇七年四月二一日　於・早稲田大学

ドイツ絶対主義期におけるバイロイトの宮廷文化
―辺境伯ゲオルク・ウィルヘルム研究―

川西孝男

ヨーロッパの絶対主義における理論研究は、第二次世界大戦終結を境に大きな転換点を迎え、ドイツにおける絶対主義の概念を形成する「領邦絶対主義」のもつ領域・地域的視点によるものが現在の主流となってきた。また、その地域内における支配関係や領邦文化などにも研究が及んでいる。

ドイツのブランデンブルク＝バイロイト辺境伯領は、「閉鎖領邦」として位置づけられ、領邦絶対主義支配が貫徹される要素が極めて高く、加えてその宮廷文化は極めて特異、あるいは個性的な様相を呈していた。ドイツの絶対主義期は三〇年戦争終結から一八世紀末にかけてであるが、同世紀初頭のバイロイト領邦の統治者ゲオルク・ウィルヘルム辺境伯の生涯に焦点を当てつつ、領邦絶対主義者たる彼によるバイロイト宮廷文化について考察した。

バイロイトに辺境伯宮廷が置かれたのは一七世紀初頭であるが、続く三〇年戦争において辺境伯領は荒廃し、バイロイト市の人口も半減して約二〇〇〇人にまで落ち込んだ。辺境伯クリスティアン・エルンストは終戦後、バイロイトを復興させたほ

か、第二次ウィーン包囲に参戦し勝利するなど、ブランデンブルク＝バイロイト辺境伯領における領邦絶対主義の礎を固めた。しかし、その宮廷は当時のフランスの模倣の域を出ず、バイロイトは依然、ドイツ辺境の軍事的要衝としての地位に留まるものであった。

この後継者としてバイロイトに生まれたのが、辺境伯皇太子ゲオルク・ウィルヘルム（一六七八～一七二六、辺境伯在位一七一二～二六）である。彼は幼い頃、宮廷から数一〇〇メートル離れた、後に彼の生涯に深く関わることになる最大直線距離一・五キロを有するブランデンブルク沼池で従者を連れてよく遊んだという（なお、この沼池は現存せず、バイロイトの絶対主義期の終焉とともに姿を消している）。

少年時代の皇太子は、他国の見聞と王室との交流を兼ねて英国を訪れたが、この渡航が彼の生涯に決定的な影響を与えた。彼はバイロイト帰国直後となる一六九五年、この沼地をブランデンブルク湖と改め、船舶の停泊が可能なように周囲を修築した後、「ネプチューン」「レーヴェ」などと名付けた軍艦数隻を建造し、湖に進水させた。そして兵士二〇〇〇人を湖の周囲や艦船に配備し、市民を動員して塹壕や司令塔を作らせて軍事演習を行なったのである。これが「バイロイト海戦」といわれ、多数の榴弾が艦船や岸辺の砲台から発射された上、兵士を木製のサーベルで格闘させるなど、実戦さながらの様相を呈し、負傷者は続出、死者すら出る有様だったという。

このドイツ内陸の地で行なわれた「バイロイト海戦」について、同地の歴史家ミュッセルらは、「初めての海洋や、英国艦隊への遭遇が皇太子の感性に火を付けた」と指摘しているが、当時ドイツに侵攻したフランス軍（プファルツ継承戦争）への防衛や、英艦隊との連携をも見据えた一種の〈海軍〉であった可能性も否定できない。フランス軍が撤退した後、この〈海軍〉は、湖上オペラの舞台要員として利用され、〈一八世紀初頭のバイロイト祝祭〉は、湖上を舞台に行なわれていたのである。

彼の英国での〈覚醒〉は海戦に留まらなかった。彼は英国の守護聖人たる聖ジョージ（ゲオルク）に魅せられ、自らの都市ザンクト・ゲオルゲンを湖周辺に建設し始めた。さらに湖には艦船停泊可能な半径百メートルの真円状の島が作られ、聖ジョージの花であるバラが敷き詰められた。また、辺境伯在位中には全長三〇メートル、一二の砲門を持つ母艦「聖ゲオルク」が完成し、この島や艦船を用いた湖上舞台でのドイツ語上演による〈海戦〉オペラは更に華麗かつ荘重さを加えた。

また、新都市には湖に面したオルデンス（『結社』、『勲章』の意）城が置かれ、ゲオルク・ウィルヘルムはこの城の大広間で毎年、聖ゲオルクの聖名祝日たる四月二三日に勲章を授けたのだが、これが後にプロイセン王国第二の赤鷲勲章となった。さらに聖ゲオルクを信奉するオルデンス教会を建立し、内部には叙勲者の紋章盾が飾られ、その数は八〇以上に上った。

このほか、彼の辺境伯治世には、ザンクト・ゲオルゲンで高級陶磁器を初め、ビールやトランプ工場などが置かれ、バイロイトの人口も五〇〇〇人を超えるなど、彼の試みが都市の発展と活気をもたらした。

以上のように、ゲオルク・ウィルヘルムはドイツ辺境のバイ

ロイトに聖ゲオルクの理想都市を建造し、独特の湖上文化を開花させたが、彼の功績は後世に引き継がれ、プロイセン皇女の輿入れによるバイロイト・ロココの完成や、当時のヨーロッパ屈指の歌劇場の設置、さらに一世紀近くを経てオペラ作家ワーグナーの移住をもたらす礎を築いたといえる。また、ゲオルク治世下のバイロイト領邦では、ドイツ領邦絶対主義がほとんど貫徹されたケースであったと同時に、その後数世紀を経て、この地から新たな文化的、精神的なうねりを起こすといった辺境改革論の視点からも注目され得るのである。